

討論 1 教育 DX の可能性: 多様性を保障する学びへの転換

近年、日本の学校教育現場では、プログラミング教育の導入や DX 推進が急がれている。一方、「小教員調査」からは、GIGA スクール構想による「一人一台端末」導入への学校現場の戸惑いが示唆される。

文部科学省『GIGA スクール構想の実現とは』(2020 年 5 月)によれば、一人一台端末導入等によって「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別に最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する」とされている。経済産業省による定義を踏まえれば、教育 DX では、「文房具」としてのデジタル端末や ICT の活用にとどまらず、教育方法など学校教育に変革を迫るものとなるだろう。

たとえば、学習活動は、教師が子どもに知識や価値を伝達することを主とする「受動的」な学びから、子どもが学びの過程で「主体的」役割を担う学びに転換しうる。それは教師-子ども関係の転換をもたらし、さらに従来の授業形態で置き去りにされがちであった多様な子どもたち(特別な支援を要する子ども、外国に繋がる子ども、女子児童生徒、性的マイノリティ、等)の学びを保障することにつながる。まさしく Diversity & Inclusion の実現である。そのために、日本の学校および社会は知の体系や価値体系の転換を迫られるであろう。(藤田由美子)

討論 2 「1 人 1 台」が変革する学びとは

「1 人 1 台タブレット」は、学校現場をどう変えるのか。コロナ禍で都鄙の差なく一気に学校のデジタル化は進み、たしかに授業内外での ICT 活用の場面は増加している。

学校現場では、従来の教科学習を前提に、そこで用いられていた教材・教具のうち ICT で置き換えることができる場面でデジタル化を進めているようである。たとえばペア学習の際に、2 人で 1 台のタブレットを利用して考えをまとめる場面があった。感染症拡大防止のために密を避けるよう指導する一方で、小さな画面を 2 人の児童が顔を近づけてのぞき込む様子を目の当たりにして、紙とデジタルとの単なる置換では、学校

や学習のスタイルは変わらないと感じた。それどころか、かえってイノベーションの実現の足を引っ張ることが危惧される。

全国一律に、形式的に「型」が整えられた今、学校教育のデジタル化が目指す方向性や ICT 機器が得意／可能とする機能を整理し、現在の学校が抱える課題解決に向けた活用方法の創造・提案が求められる。その際、従来の「教科」の枠組や授業の方法が大きく転換することもあるだろう。また、活用場面や方法は全国「一律」ではなく、各学校や地域の実情に即したものとなると予想される。しかしそれらを恐れず、柔軟に立ち向かうことによって、はじめて学校や学びが変革すると言えるだろう。(遠藤宏美)

討論 3 PC が外国ルーツの子どもの学びの問題を解決するために必要なこと

日本の学校に学ぶ外国にルーツを持つ子どもたちが、学校での学びを進めていこうとする時に、大きな障壁となるのは日本語の習得であることは周知のとおりである。

そして、かれらは個々のレベルに応じた日本語習得が早急に求められるのに加えて、教科学習では当該学年の一定水準までキャッチアップすることも同時に求められる。つまり外国ルーツの子どもたちは常に二つの面における同調が求められるのであり、担当教員には個々の子どもの能力とニーズに合わせた細かい対応が求められる。

そうした中で PC 端末の一人一台の配布はかれらの学びをこれまで以上に進展させる契機となる可能性を秘めている。それは子どもたちの言語、文化・社会的背景の多様性に柔軟に対応し得るハードとしての潜在力があると考えられるからである。

一方で日本語指導教室などにおける PC 端末活用と日本語学習支援のあり方や、通常の教室での教科学習における言語的な支援の可能性など、検討すべき課題は多く、今後ハード・ソフト共に十分な検討を早急に進めることが求められると思われる。もちろん、これらに合わせて外国ルーツの子どもたちがもつ教育上の可能性について教員並びに研究者がもっと注目する必要があると思われる。(角替弘規)